

夫婦パスタ日記

第10話『豚肉とほうれん草のスーパスタ』

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

寺川 和也（22） 部品メーカー社員
寺川 千晴（18） 和也の妻、スーパ〖『ユーミー』レジ担当

立花 圭吾（33） 印刷会社『京町印刷』営業部社員

権藤 浩一（60） 洋菓子店『ヴェール』店主

権藤 明美（58） 浩一の妻、百貨店『山越屋』企画部課長

柏原 啓造（41） 千晴の父、漁師、愛媛在住

柏原 明日香（39） 千晴の母、愛媛在住

和也の長兄（声）

スーパ〖『ユーミー』広報担当社員

スーパ〖『ユーミー』の客

洋菓子店『ヴェール』の従業員たち

配達業者

1 アパート・全景（朝）

2 同・寺川家・リビング

和也と千晴が、朝食を食べている。

千晴「ねえ、この間の話、本当に良いの？」

和也「愛媛に行くやつ？」

千晴「うん。もし和也が本気で愛媛に行って
良いって言うんなら、また私から母さんに
伝えとくけど」

和也「結婚してからの五年、一度も帰ってな
いだろ。俺の実家には何度も行ってるのに、
千晴の実家に帰ってないと、あちらのご両
親だって寂しいだろ……」

千晴「まあ、そうだよな。新潟の和也の実家
は、何ならお盆と正月は、結婚してから毎
年行ってるもんね。お兄さん二人とも結婚
したから、それぞれの奥さんも集まって、
結構賑やかだけど、うちは一人っ子だから、
ここ五年は夫婦だけで過ごしてるんだろう
な」

和也「米農家継いだり、農協に就職したり、二人ともがつつり農業の世界でやってるから、親父もおふくろもホッとしてるだろうよ。たまには、俺たちが帰らなくなつて大丈夫だよ」

千晴「一応伝えといたほうが良いんじゃない。今年の年末は、私の実家に行くつて」

和也「最悪、少し遅れて正月に合流しても良いけどな。毎年二日の鍋パーティーに間に合えば、親父たちも悪い顔しないだろう」

千晴「今年の年末年始は、忙しくなりそうだね」

和也「そうだな。やっぱり、俺たちで愛媛に行かないと、お義父さんも寂しいと思われるだろうし」

千晴「寂しいなんて思う人とは思えないけどね、うちの父さんは」

和也「口で言わないだけだよ。お義母さんからの手紙にも書いてあつただろ。『一人娘が可愛いから』って。俺は男兄弟だったけ

どさ、何となくそういう気持ち分かるような気がするんだよ」

千晴「そうかなあ」

和也「結婚の報告の時、お義父さん、ずっと酒飲んでただろ。あれは恐らく娘を奪われる寂しさを紛らわすためだったかもしれない。それに、俺に対して自分を強く見せたいと思ったり。お義父さん、本当はきつと繊細な人なんじゃないかな」

千晴「全然繊細なところ見たことないけどね。どっちかっていうと、傲慢で自分勝手な感じがする。それに亭主閑白で、家のことは全部母さんに任せきり」

和也「そうやって見せておきたいんだよ。繊細だからこそ、弱い父親の姿っていうのを見せたくないんじゃないかな。俺だって、

千晴の前では弱いとこ見せたくないし」

千晴「へえ、じゃあ和也も、私に見せられない弱いところがあるんだ」

和也「そりやあるよ。俺だって。完璧な人間

じゃないんだからさ」

千晴「でもさ、私だったら逆に弱いところ見せてほしいって思うけどな」

和也「え、そうなの？」

千晴「だって、弱いところを私がカバーしたいって思うから」

和也「千晴……」

千晴「和也もさ、私が弱いところ見せたら、そこを何とかしたいって思うでしょ？ 自分だったらこうしてあげたいなって」

和也「え……まあ……」

和也（M）「それ以上俺は、千晴に何も言い返せなかった」

タイトル——夫婦パスタ日記

第10 話『豚肉とほうれん草のスープ
パスタ』

3 愛媛・柏原家・全景

T『7 年前』

4 同・同・居間

湯飲みに酒を注いで飲み続けている啓造（当時41）と、台所で弁当を作っている明日香（当時39）——スーツケースを持って、千晴（当時18）が入ってくる。

千晴「じゃあ、行くね」

明日香「ちいと待って。弁当作ったけん、これ持ってって」

と、弁当箱を入れた袋を千晴に渡す。

千晴「ありがと」

明日香「向こう着いたら、連絡してね」

千晴「分かってる」

明日香「（啓造に）あんだ。千晴、もう行くって」

啓造「（酒を飲み続けて）……」

千晴、スーツケースを持って出ていこうとする。

啓造「千晴」

千晴、立ち止まる。

啓造「（酒を飲みながら）都会の空気が嫌になつたら、いつでももんでこい。大学なんて途中で辞めてもええんじゃけん」

千晴「父さん……」

明日香「あんた……」

千晴、啓造の後ろ姿を見つめる。

5 スーパー『ユーマー』・店内（現在）

客の商品をバーコードスキャンしている千晴。

千晴（N）「漁師町で育った私は、都会の空気を味わってみたいという理由だけで大学進学を選んだ。短大の二年間を過ごした後、妊娠を気に和也と結婚をするために、故郷には帰らないことを決めた。私を妊娠させたことに対する謝罪のためと、結婚の承諾のためと、和也は二回にわたって父と対面した。二回とも父に感情をぶつけられたため、和也が実家の父を苦手としていること

を私はよく理解していた。それだけに、今回和也が愛媛に行こうと自分で決めたことは正直意外だった」

6 同・事務所

千晴が、スマホで電話をかける。

7 愛媛・柏原家・居間

お茶を飲みながら、テレビを見ている

明日香——スマホの着信が鳴り、出る。

明日香「（電話に）もしもし、千晴」

と、スマホから千晴の声。

千晴の声「あ、母さん。今、父さんいる？」

明日香「父さん、今漁協の寄り合いでおらん

よ」

8 スーパー『ユーミー』・事務所

電話をしている千晴。

千晴「あのさ、年末に和也と一緒に帰ろうと思うんだけど」

と、スマホから明日香の声。

明日香の声「そう。二人でもんてくるのね」

千晴「父さんにも、私たちが帰ること、伝え
といて」

9 愛媛・柏原家・居間

電話をしている明日香。

明日香「どがいな反応するかしらね。お父さん、和也君のことになると神経質になるじやろ。結婚の挨拶でうちに来た時だって、自分の弱いところ見しとらないけんお酒に頼つとったけど、年末にあんたたちがもんてきたら、ずっとお酒飲んでなきやいけんようになるもんね」

10 スーパー『ユミー』・事務所

電話をしている千晴。

千晴「そうだね。傲慢で強がりだからね、父さんは。和也はさ、『お義父さんは、本当はきつと繊細な方』なんて言ってたけど」

明日香の声「和也君は、人を見る力があるの
かもしれんわね」

千晴「え？」

11 愛媛・柏原家・居間

電話をしている明日香。

明日香「千晴は、お父さんが傲慢だなんてよ
う言うけど、あの人は繊細よ。何十年と
女房やってきた私が言うんじゃけん、間違
いないわ」

千晴の声「へえ、そうなんだ」

明日香「千晴は、そうは思わん？」

12 スーパー『ユーミー』・事務所

電話をしている千晴。

千晴「だってさ、深夜から漁に出て、昼前に
帰ってきたかと思えば、そこから酒飲み始
めて、私が学校から帰宅する夕方には顔を
真っ赤にしてたじゃん。私、そういう父さ
んの姿ばっかり見てきたから、全然繊細な

内面があるなんて思えないんだけど」

明日香の声「まあ、いずれ分かるわ」

千晴「（時計を見て）あ、母さん、ごめん。

もう休憩時間終わりそうだから。じゃあ、父さんに伝えといてね。うん、うん、じゃあね（と電話を切る）」

千晴、出ていこうとすると、奥の応接室から、広報担当社員と圭吾が出てくる。

社員「では立花さん、よろしくお願いいたします」

圭吾「お任せください。デザイナーが、上手くまとめてくれますから」

と、千晴に気づき、会釈する——千晴、一礼して、店内に戻っていく。

13 スーパー『ユーミー』・店内（現在）

客の商品をバーコードスキャンしている千晴。

千晴（N）「この作業をしていると、お客さ

んの買い物かごから、いろんな想像をかき
たてることがある。『今晚はすき焼きでも
するのだろうか』『この魚をどう調理する
のだろうか』『この食材で一体何を作るの
だろうか』と。この想像が、私にとっては
献立考案のヒントになることもあれば、常
連客の場合だと会話のネタになることもあ
った」

14 アパート・寺川家・玄関（夕）

千晴が帰宅する――ドアの前で、大き
な段ボール箱を持った宅配業者が立っ
ていることに気がつく。

千晴「うちに荷物ですか？」

宅配業者「はい、お荷物です。重たいですよ」

千晴「じゃあ、ここにお願いします」

と、鍵を開けて、ドアを開ける――段
ボール箱を置く宅配業者。

宅配業者「では、こちらにサインお願いしま
す（と端末を見せる）」

千晴、端末の画面に『寺川』と書く。

宅配業者「ありがとうございます（と去っていく）」

千晴「ご苦労様でした」

と、ドアの鍵を閉めると、段ボール箱の伝票の送り主の欄を見る。

千晴「ああ、お義兄さんからか」

千晴（N）「私の実家と同じように、新潟の和也の実家からも定期的に荷物が届くことがある。和也の実家の荷物は、大体が自分のところで育てている米であったり、農家仲間からお裾分けしてもらった野菜類だった」

千晴「（箱を見て呟いて）今回はどんな野菜かな」

15 道（夕）

仕事帰りの和也が、作業着姿で歩いている。

16 洋菓子店『ヴェール』・表々店内（夕）

和也が通りかかり、ふと立ち止まると、そのまま入店する――レジの前にいる店員が迎えて、

店員「いらつしやいませ」

と、焼き菓子を並べていた浩一も振り向いて、

浩一「いらつしやいませ。ごゆつくりどうぞ」と、奥の厨房へ入っていく。

和也、ガラスケースに並べられているいくつもの種類のケーキを見つめている。

和也（M）「どれにしようかな」

和也、しばらくガラスケースを見つめ、和也「いちごのショートケーキと、モンブランを一つずつ」

店員「かしこまりました」

と、ガラスケースから丁寧にケーキを取り出して、白い厚紙の箱に入れる。

店員「こちらでよろしいですか？」

和也「はい」

店員「保冷剤入れておきますが、なるべく早めにお召し上がりになるか、冷蔵保存してくださいね」

和也「分かりました」

× × ×

会計を済ませた和也が出てくる。

和也（M）「今日は二つしか買わなかったけど、また来てみよう」

と、歩いていく。

17 アパート・寺川家・玄関（夜）

ケーキの箱を持った和也が帰宅する。

和也「ただいま」

と、大きな段ボール箱に気がついて、
怪訝な顔をする——千晴が玄関までや
つてくると、

千晴「おかえり。これ、新潟のお義兄さんか
ら」

和也「今回は何送ってきたんだろうな」

千晴「（ケーキの箱を指さして）それ、何？」

和也「ああ、これ？ ケーキ買ってきた」

千晴「どうしたの？」

和也「（ケラケラ笑って）もう忘れちゃったのかよ。今日、俺たちの結婚記念日だろ」

千晴「……あッ！ 完全に忘れてた」

和也「俺も会社の帰り道で思い出したんだよ。仕事してると、こんな大事な日も忘れちゃうんだなって……」

と、段ボール箱のガムテープを剥がして、開け始める。

和也「きつと兄貴は、今日が俺たちの結婚記念日だっていうのを知ってて、送ってきたんだろうな。兄貴は律儀なんだよ、俺と違って」

千晴「（箱の中身を見て）お米に大根ににんにくにオクラにほうれん草か」

和也「相変わらず、いろいろ送ってくるな」
千晴「お米送ってくれるの、本当にありがた
いよね。あ、今日どうしよう。野菜炒めす

るつもりで材料買ってきたけど、せっかくの記念日だし、何か違うやつ作ろうか？」

和也「そうだなあ……。 (と段ボール箱の野菜を見て) 今日、俺作ろうかな」

千晴「え、何作るの？」

和也「豚肉ってある？」

千晴「野菜炒め用に、今日買ってきたけど」

和也「愛媛のお義母さんが送ってきた、出汁のパックは？」

千晴「まだ結構残ってる」

和也、大きく頷くと、段ボール箱の中からほうれん草を取り出し、

和也「その豚肉と、このほうれん草で、パスタ作る」

千晴「え、どんなパスタ？」

18 同・同・リビング

台所で、和也がほうれん草の水洗いをしている――以下、以下、調理工程をカットバックで。

和也（M）「ほうれん草は、茎や根に砂が残

っているので、しっかりと洗い落とす」

と、千晴が覗き込んできて、

千晴「どんなの作るの？」

和也「まあ見てろって」

と、ほうれん草を絞ると、包丁で根の部分を切り、茎と葉をざく切りにする。

和也（M）「ほうれん草百グラムは、水気を切ったら根の部分を切り落とし、茎と葉をざく切りにする」

和也、調味料のかごに入っている出汁パックのパッケージを取り出す。

和也「（千晴に）出汁のパックって、どれぐらい使って良い？」

千晴「何個でも良いよ」

和也は出汁パックのパッケージの裏を見る。

和也（M）「（パッケージの表記を読み上げて）『美味しくいただける』 ①水500ml（カップ2・5杯）に本品1袋

（パックのまま）入れて火にかけます。

②沸騰しましたら中火にて鍋のふたはせず
3〜4分煮出します。 ③火を止め、パックをお箸などで軽く絞るように取り出します。
※上記は目安です。お料理によって水の分量を変えてください。』……よし、パック三つ使う」

× × ×
和也、ステンレス製の鍋に、水と出汁パックを入れて、火にかける。

和也（M）「ステンレス製の鍋に、水一・二リットルと、『海鮮だし』パック三つを入れて火にかける」

× × ×
鍋の中の水が沸騰している。

和也（M）「やがて水が沸騰すると、パッケージの工程通り、中火にして四分煮出す」

× × ×
四分後——和也、菜箸でパックを絞り、ゴミ箱に捨てる。

和也（M）「四分経ったらパックを絞って、ゴミ箱に捨てる。鍋の中の水は、しっかりと出汁が取れて明るい茶色をしている」

× × ×

和也、鍋の中に計量スプーンで、おろしにんにく、酒、醤油を入れて、菜箸で軽く混ぜる。

和也（M）「そこへ、おろしにんにく、酒、醤油をそれぞれ大さじ二杯入れて、軽く混ぜる」

和也「（千晴に）豚肉って、どれ？」

ソファーに座っていた千晴、それへ、千晴「電子レンジの中にあるよ。解凍したから」

和也、電子レンジの扉を開ける——豚こま切れ肉のパックが入っている。

× × ×

和也、豚こま切れとパスタを鍋の中に入れて煮込む。

和也（M）「豚こま切れ肉二百グラムとパス

タ二百グラムを一緒に入れて、中火のまま
パスタの規定の茹で時間マイナス三分、こ
こでは四分煮込んでいく」

× × ×

四分後——和也、鍋の中にほうれん草
を入れる。

和也（M）「四分経ったら、ほうれん草を入
れて、さらに四分煮込んでいく」

煮込んでいる鍋の様子を見ている和也
——ソファ——に座っている千晴が振り
向いて、

千晴「すごい良い匂いする」

和也「出汁が良いんだろうな、きっと」

× × ×

和也、底の深い皿に、それぞれパスタ
と具材を盛り付け、鍋底に余った煮汁
を注いでいく。

和也（M）「よし、できた」

と、スマホを取り出して、写真を撮る。

19 完成した『豚肉とほうれん草のスー
プ
スタ』

20 アパート・寺川家・リビング（夜）

和也、撮影した写真を、メッセージに
添付して送る。

和也「できたぞ」

千晴、ソファーから立ち上がり、台所
までやってくると、

千晴「はい。これは、何の Pasta？」

和也「その名も『豚肉とほうれん草のスー
プ
Pasta』だ」

千晴「スープ Pasta か。出汁をそうやって使
う方法もあるんだ」

和也「しかも、出汁取った鍋でそのまま具材
も煮込んだから、洗い物少なくていい」

千晴「天才だね。今度私も作ってみよう」

和也、盛り付けた皿を、そのままテー
ブルへと運ぶ――向かい合うように座
る和也と千晴。

和也・千晴「いただきます」

と、食べようとすると、

千晴「あッ、ちよつと待って」

和也「どうした？」

千晴「結婚記念日、おめでとう」

和也「ああ、そうだな。結婚記念日、おめで

とうございます」

千晴「これからもよろしくお願いします」

和也「こちらこそ」

と、それぞれパスタを食べ始める。

21 愛媛・柏原家・居間（夜）

啓造と明日香が話している。

啓造「千晴が、もんで来るのか？」

明日香「うん。今日、あの子からそうやって

連絡があつた」

啓造「和也も一緒か？」

明日香「当たり前じゃろ、夫婦なんじゃけん」

啓造「そっか……あいつら、もんで来るのか」

明日香「（啓造の顔色見て）今から待ち遠し

ゆうてしょうがないじゃろ、千晴が久しぶりにもんて来るけん」

啓造「バカ、そんなわけないじゃろ」

明日香「結婚の挨拶の時からじゃけん、五年ぶりじゃのお」

啓造「何かあったのか？」

明日香「なんで？」

啓造「結婚してから、いっぺんもこっちにもんてこなんだやないか。盆も正月も、新潟の和也の実家で過ごしてやがったのに」

明日香「嬉しいじゃろ、千晴がもんてくるけん」

啓造「別に、嬉しいわけないじゃろ。もう寝るぞな」

と、そそくさと出ていく。

明日香「（苦笑して呟いて）分かりやすいんじゃないけん」

22 アパート・寺川家・リビング（夜）

台所で食器洗いをしている千晴——ソ

ファーに座っている和也が、スマホでメッセージを送っている。

和也のメッセージ&声「荷物、今日届いた。ありがとう。送ってきた荷物の中にあったほうれん草で、今日はパスタ作ったよ」

と、パスタの写真も添付する――そこへ、和也の長兄からの返信が来る。

和也の長兄のメッセージ&声「美味そうだな。カズが作ったのか？ それと、結婚記念日だったな。千晴ちゃん、大事にしろよ」

和也、返信をする。

和也のメッセージ&声「ありがとう」

と、親指を立てたグッドポーズのスタンプを送る。

千晴「ねえ、そろそろケーキ食べよっか」

和也「ああ、そうするか」

千晴「すぐ用意するね」

と、冷蔵庫からケーキの箱を取り出し、取り皿に分ける。

千晴「何飲む？」

和也「ホットコーヒー、ブラックで」

千晴「はい」

×

×

×

ソファーに座っている和也と千晴が、
それぞれケーキを食べながら、コーヒ
ーを飲んでいる。

千晴「美味しいね、これどこの？」

和也「駅前の店。確か『ヴェール』って言う
たかな」

千晴「ああ、権藤さんのお店だわ」

和也「権藤さん？」

千晴「この辺じゃ結構有名なパティシエのお
店なんだよ」

と、棚の中にある地域情報誌を持って
きて、ページを開く——浩一が映って
いるインタビューと店舗紹介の記事が
載っている。

和也「このオーナーパティシエの人、何か愛
媛のお義父さんに似てないか？」

千晴「まあ、強面だからね。あ、そういえば

さ、今日の昼休憩の時に、母さんに電話した。年末あつちに帰るって話」

和也「ああ。何か仰ってた？」

千晴「『どんな反応するかしらね』って笑ってた。それに、うちの父さんが繊細だって

和也が言ってたことも、母さんに伝えたの」

和也「え、そんなことも？」

千晴「そしたらね、『和也君は、人を見る力があるのかもしれないわね』って言ってた。

母さんも、父さんが繊細だって思ってるみたい」

和也「ほら、やっぱりお義父さんは繊細な人なんだよ」

千晴「年末に帰る時まで、少しでも繊細な部分が治ってれば良いけど」

和也「何か、今から緊張してきたなあ」

苦笑している千晴。

23 街（その年の冬）

ツリーやリースが方々に飾られたクリ

スマスの雰囲気になっており、クリスマスソングが聞こえてくる。

24 アパート・寺川家・居間

小さなクリスマスツリーに飾り付けをしている和也と千晴。

千晴「早いな、もうクリスマスだよ」

和也「クリスマスも早いけど、それが終わったらもう次は年末年始でお正月の準備だぞ」

千晴「母さん、今年の正月は私たちが帰るからって張り切ってるみたい。あの出汁のパック、追加で注文したみたいで、それで年越しそばと、おせち料理と、お雑煮の支度するんだって」

和也「向こう着いたら、お義父さんと何話せば良いのかな」

千晴「何とかなるよ。お酒だって、和也も少しは強くなっただろうし」

和也「まあな。けどさ、俺たちが愛媛に行くのって、ある意味歴史的なタイミングにな

るんだろうな」

千晴「そうだね。大きな出来事だよ」

笑い合う和也と千晴。

25 権藤家・LDK

ソファ―に座っている明美が、単行本
を読んでいる――煙草の箱を持った浩
一が戻ってくる。

浩一「何読んでんだよ？」

明美「若水エリ先生の『ビター&スイート』
よ」

浩一「ああ、それか」

明美「何回でも読んじゃうのよね。何せ、あ
なたの店も、パティシエのことを把握した
いからって若水先生自ら取材に來られたわ
けだし」

浩一「うちの長沢の旦那のお母さんだからな。
まあ店の宣伝にもなると思って、あの時は
引き受けたけど、あんなに効果があるとは思
わなかったな」

明美「そりや地元で活躍する人気小説家だもの。うちの催事会場で、出版記念のサイン会やった時もすごい行列だったんだから」

浩一「お前ももらったんだろ、サイン」

明美「もちろん」

と、表紙の裏を見せる――『若水エリ』のサインが書かれている。

浩一「俺はあんまり小説読まないから分からないけどよ、若水先生、新作出してるのか？」

明美「出してはいるけど、作品の数で言えば少なくなってるんじゃないかな。昔は一年に何冊も出版されてたし、新聞の連載小説も担当されてたからね」

浩一「やっぱり、作品を生み出すっていうのは、どこの世界も難しい作業なんだよ。俺だって、いつまでも一人でメニュー考えるのは限界だと思ったから、うちの従業員たちに企画募ったぐらいだからな」

明美「小説は一人で書かなきゃいけないもん

ね。ゴーストライター頼むわけにいかないし」

浩一「当たり前だろ」

明美「敏腕編集者が側にいらっしやっても、やっぱり厳しいのかしらね」

浩一「敏腕編集者？」

明美「若水先生のご主人」

浩一「ああ、そういや長沢そんなこと言うてたな。旦那の父親が、担当編集者やってて、出版社の役員もやってるって」

明美「若水先生には、これから作品発表してもらいたいわね」

明美が持っている単行本『ビター&スイート 若水エリ』の表紙にズームアップ。

つづく